

『はじめてのサボタージュゝあなたのとなりで息をするゝ』

特典シナリオ台本

【登場人物】

柊山 玲（ふきやま・れい）

中学の頃に荒れてた元ヤンキーの少女。

高校入学を機にそれまでのコミュニティを抜けて、現役ヤンキーではないと主張している。

が、あなたの目には十分ヤンキーに見える。

クラスに馴染めない玲のお気に入りの居場所は屋上。

あなたと打ち解けた玲は、屋上で二人きりの時間を一緒に過ごすようになる。

一学期はケガ療養のため、ほとんど教室に行けなかった。

そうこうするうちにクラスから浮いてしまったなーと居心地が悪くなり半不登校に。教室にきても寝てるだけ。

《年齢》 16 《身長》 163センチ

《バスト》 C

あなた

受験が終わって気が抜けてしまった優等生。

母親の期待にプレッシャーを感じ、最近は息詰まる毎日を送っていた。

教室に居づらさを感じていたあなたは、ある日、人生で初めて授業をサボり、気まぐれに辿り着いた屋上で玲と出会う。

玲の隣で過ごす時間が日に日に心地よくなっていく。

【あらすじ】

あなたは私立の付属女子高の一年生で、クラスの委員長。

二期が始まってから、なんとなく教室に居心地の悪さを感じていた。

ある日気まぐれに向かった屋上で、あなたは「元ヤンキー」と噂のクラスメイト・玲と出会う。

玲はあなたのクラスメイトだが、教室にはほとんど顔を出さない。

クラスに馴染めず、屋上や保健室を転々としているらしい。

屋上で出会ったふたりは、なんとなく気の休まる時間を共有し、

次第に仲を深めていく。

玲の誘いは、あなたには初めてで刺激的なことばかり。

玲も、あなたと共に過ごす心休まる時間を大切に感じている。

元ヤンキーと委員長。正反対の二人が少しずつ親しくなっていく、

愛おしい時の流れを追体験する音声作品。

【EP01：はじめてのサボタージュ】

○場所：屋上へ向かう階段

秋。高校の校舎。もうすぐ昼休みが終わる。
あなたは、屋上に向かっていてる。

○場所：屋上

「……………」

「……………（あなたを見つける玲）ん……………」

「あれ。委員長じゃん」

「（独り言っぽく）おー、教室以外で見るの初めてだ」

「……………（スマホに意識を戻していたが、
あなたが留まるので話しかける）」

「……………あ。あたし。同じクラスの」

「そう。柊山 玲（ふきやま・れい）」

「（驚いて）…………フルネームで覚えてんだ。委員長ってやっぱりすごいな」

「（指摘を受けて） ああ？ ヤンキーじゃねーよ」

「……まあ、昔の話（この話はおしまい、と切り上げる）」

「……（スマホを眺める）」

「（あなたが立ち尽くしているので気になって） ……ん」

「あのさ。 ……あたしを探しにきたわけじゃ…
（ないな、という確信がある調子で） ないよな」

「おっけ」

「……………（スマホを眺める）」

「……好きなとこ座れば？」

「……（スマホを眺める。三分ほど吐息継続）」

チャイムの音。

「（教室に帰らなくていいのかな？と気になるニュアンスで） ……あー」

「チャイム（鳴ったよ、と教える声掛け）」

「……委員長」

「戻んなくていいの？ 教室」

「……あたしが聞くことじゃねーか」

「ん。あたしは行かねえ」

「いつもここでぼーっとしてる」

「今日みたいに晴れてる日はなー」

「（合点がいった）……委員長、サボリか」

「まあ、サボリでもなきゃ屋上なんか来ないか。定番だよなあ」

「……（スマホに視線を戻す）」

「……（沈黙、一分ほど）」

「なー、サボリの『サボ』ってなに？」

「……へー、サボタージュ」

「（スマホで検索して）お、出た。怠ける……」

「（怠ける、と聞き）あー、まあ。怠けてるよな」

「おっ、別の意味もあるって」

「破壊活動、だってよ」

「（噛みしめて）……かけーな、サボる……」

「あたしそんなカッコイイことしてたのか？」

「でもさ、なんかサボテンみたいじゃね？」

「……これ破壊活動か……」

「はー。色んな意味があんだな。知らなかった」

「え、委員長知ってた？　へー、さすが」

「やっぱり委員長って物知りだよな」

「てか、大抵の人間はあたしより物知りだ（笑）」

「……………（沈黙、1分ほど。スマホを見ている）」

「まあ……あたしはべつに　邪魔とかじゃないし」

「あ、ていうかあたしが邪魔ならどっかいくけど」

「（邪魔じゃないと言われて頷く）……ん」

「……ゆっくりしてけば？」

「せっかくの屋上なんだし、良い天気だし」

「あたしも、勝手にやるし」

「……もしかしてはじめて？」

「サボるの」

「（あなたの肯定を聞いて）うおー、マジか」

「（楽しそうに）……いいね」

「じゃ、なおさらごゆっくり」

「……（スマホに視線を戻す）」

「……（吐息。三〇秒程度）」

「……（吐息。三〇秒程度）」

【屋上占有倶楽部1・ランチそしてお昼寝】

数日後。

あなたは、屋上で過ごす時間を作るようになっていく。

今日の昼休みも、お弁当を持って屋上へ行く。

○場所..屋上

ドアを開けるあなた。

玲の姿が見える。玲はあなたに気付き手を上げる。

「お。来たか、委員長」

「お先いただいてまーす」

あなたは玲の隣に座り、お弁当を広げる。

「……（軽く笑う）」

「あたしのはコロッケコッペ」

「売店のやつ。人気商品」

「昼休み混むから、先に買っとく」

「4時間目始まったくらいかな、お店来てるの」

「あはは、もう顔パス」

「パン屋のおばちゃんに小言言われっけどなー、授業受けろって」

「美味しいよ？ ほら」

食べかけのパンをあなたへ差し出す玲。

一口もらうあなた。

「（笑って）……な？」

「うまいっしょ」

「……………（咀嚼音）」

「（紙パックの飲料をストローで飲む）んく、んくっ……」

「っはぁ」

「…………（一息つく）」

「委員長の弁当、今日のも美味そー」

「玉子焼きだ」

「……玉子焼き、甘い派？　しょっぱい派？」

「あたしはねー、…どっちも好き（笑う）」

「で、委員長の弁当は？」

「おしえておしえて。ほら、あー（口を開ける）」

「ほーら」

「あー（口を開けて待つ）」

「んむ（玉子焼きを食べさせてもらう）」

「ん、ん……（咀嚼）」

「甘いやつだ（笑う）」

「ちょうどいいかんじの甘さ。これいいなー」

「……あたしも今日から甘い派かも」

「え、こだわらないの？」

「じゃあ、次の玉子焼きはしょっぱいかもなんだ」

「……………それも食いてーな」

「予約しとくわ」

「……（ストローで飲料を飲む）」

「……………いいんちょー」

「……………うめーか？ 弁当」

「（笑って）ゆっくり食べよ」

「（満腹で）はあ……………」

「いーい天気だ」

「……………くぁ（あくび）」

「いいんちょー……………肩借りるー」

あなたの肩に頭を乗せる玲。
以降、眠たげな声で、ぼそぼそと喋る。

「……………いいんちょーも、屋上気に入ったみたいじゃん」

「ね。好きに入れるのいいよな」

「放課後は園芸部とか、活動してるらしい……」

「向こう側にあれあった、あれ。花植えるやつ……」

「プラなんとか。プラン……」

「あー、それぞれ。プランター。いっぱいあった」

「でもなんか昼は人こない」

「……え、あたしのせい？」

「えー。まじか、みんなビビってんなよな」

「じゃああれだな。……ラッキーだな。にしし」

「あたしと委員長でさ、屋上独占」

「屋上独占クラブ。（笑って）……なにそれ」

自分で名づけて笑う玲。

「委員長は、ビビらなかったん？」

「屋上にあたしいてさ」

「……まあ委員長、あんとき顔面強張ってたけどな？（優しく笑う）」

「委員長ガッツあるよ」

「だって、怖くてもそばにきてくれたんだろ？」

「てか怖くなかったってこと？」

「まじか舐められてたあたし、やべー」

「……ま、委員長だもんな」

「あれだろ委員長って。」

「クラスの総長ってわけだから、つまり一番偉い」

「ってことは、一番強い」

「違うか？（笑う）」

「お。ぜんぶ食べてえらい」

「ごちそーさまでした」

「……ふわぁあ……（長めのあくび）」

「ねみ……」

「そー、昨日夜更かし。……いや、漫画読んだ」

「……寝るわ……委員長、おやすみ……」

「起こさなくていいから……」

「てきとーに……」

「……………（寝息）」

玲の寝息につられ、あなたも眠気におそわれる。
やがて、肩を寄せ合って眠りにつく。

○ファッションビル

五限目の時間。

昼休みに寝落ちして授業をサボってしまったあなた。

ぼんやりと聞こえてくるのは、玲の吐息。

スマホでパズルゲームをしているらしい。

プレイがうまくいかず、試行錯誤している様子。

「（棒キャンディーを咥えたまま、ゲームプレイ中の呟き）
んー、あれえ……、っしょ……」

「（おかしいな、の意で）……っかしーな……ん、こうか」

「（ゲームオーバーして）あー……」

「もっかい」

「……（ゲームに集中する吐息）」

「……（時々、口の中で飴と歯がぶつかる音）」

「ん、しょ……んっ、……こうだ……っよし！……あ」

あなたが目を覚めたことに気付く玲。

「悪い。委員長、起きた？」

「んーと、いま十三時三十分、ちょっと過ぎた」

「（楽しそうに）サボりだなー」

「委員長、さぼりだ」

「ま、あたしもだけど」

「いんじゃない？ 別に。授業一回くらい、委員長ならさ」

「……（飴を舐める）」

「……あ、これ。委員長にもあげる」

「タバコやめたからさ、代わりに持ってたの」

「癖んなっちって、ヤバイ。太りそう」

「だから委員長にも押し付けとこう（笑う）」

玲から受け取ったキャンディの包みを開けるあなた。

「（嬉しそうに）それ、期間限定のパイン味だ。ちょっとだけしか入ってねーやつ」

「ラッキーだな（笑う）」

キャンディを啜えるあなた。

しばらくふたりでそれぞれキャンディを舐める無言の時間。

「……………（飴を舐める）」

「てか委員長はなんでこんなところ居るの？」

「いやあたしが聞くことでもねーけど」

「……………」

「…………まあ、別にいいか」

「あたしはなー、ほら、こんなだろ」

「見てりゃわかると思うけど居づらくてな」

「いや、溶け込む気はあったんだよ？

ヤンチャすんのは中坊までって決めててさ」

「そしたらさー、足やっちゃったんだよ、足」

「…………コケたんだよ、バイクで」

「そう、入学のタイミングでにゅーいん（入院）」

「でリハビリしてたら登校できなくてさあ」

「だからさ、もーなんつうの？ クラスがアウェイなわけ」

「浮いたよなー完ぺきに」

「で、あたしがいると空気ヒリつくじゃん？」

「（ため息）……いろいろ噂流れてっからなあ」

「うちあれだろ、中学からの内部進学組がいて」

「まあそいつらがな。昔の話ずっとするから、高校から入ってきたやつらはビビるだろ」

「今はおとなしくしてんだけどなー」

「まー刺激ないからね、一貫女子校は」

「（ため息交じりに）噂は長引くわ」

「（面倒くさそうに）はー、ったく……」

「だからまあ、ここ誰も来ないし居心地よくて」

「あ、委員長はきたけど」

「そんなかんじ」

「……（少し考える。話すかどうか）」

「……いや、最初はさー、委員長がクラスを代表してあたしのこと
どーにかさせられそーになってんのかなって」

「それで、ほんとはやなのに様子見にきたりしてたんかなって」

「だとしたらかわいそーかなって」

「……違うん？」

思いつきり否定するあなた。ぶんぶん首を振る。
自分の意思でここに来たことを伝える。

「……（笑って）そんなしなくても分かるって、首そんな振るとイワすよ」

「あと飴、喉に刺さる」

「……ん（微笑混じりの吐息）」

「うん。じゃあ、いい」

「……………（リラックスした呼吸）」

「あー……良い天気」

「……（誘うかどうか考える）」

「（思い切って）なあ、このままさぼっちゃうか」

「（笑って）いや、もうサボってんだけど」

「あれだよ。どっかあそびにいこーよ」

「もう教室戻る気しねーじゃん？　なら、どーんとさ」

「行きたいところある？」

「あたしは、まあ、どこでもいいよ。どっか行ければ」

「あっ、あれやろうぜ。プリ」

「撮るんだろみんな。女子は」

「……マジ？　撮ってない？」

「え、やば……もう流行ってないのかな」

「あたしもわかんねーや。走ってばっかだったから」

「あれで。バイク」

「中坊のときは、そればっか」

「あとなんか喧嘩とか。あんましねーけど、痛いのがだから」

「あー、……まあ、舐められたときだけな」

「……（小さく笑って、息をつく）」

「まあじゃあさ、とりあえず行くか」

【EP04：タンデム・エスケープ】

○学校・駐輪場

駐輪場へやってきたあなたと玲。

あなたの自転車（ママチャリ）の前で立ち話。

「これが委員長の……（愛車かゝと眺める）」

「ママチャリだ。重くねえ？」

「ま、ちょうどいいやケツ乗れっし」

「あたしは徒歩通。歩いてんの」

「なんか膝？ あんま曲げるなって、まだ」

「だからチャリとか漕げねーの今」

「まあバレねーと思うけどな」

「だからあたしが漕いでもいいけど」

「（笑って）……だめか」

「じゃさ、委員長乗っけてくれよ」

「だいじょぶ。コケても怒んないし」

「コケるときは一緒だろ。なー？」

「よっしゃ」

自転車を動かす。

「ここで乗ると目立つか」

「もうちょい転がして、外で乗ろう」

「怒られたらあたしに脅されたって言や良いよ」

「（気づいて）……もう脅してんのか？　これ？」

「『お願い』なんだけどな」

「いや悪い、いま余計怖くなったな」

「……（小さく笑う。楽しい）」

校門を出て、しばらく自転車を押していく。

自転車を止め、運転席にまたがるあなた。
通学鞆を背負う玲。

「んじゃ、お邪魔しまーす」

自転車の荷台にまたがる。

「おー、荷台かてえな（笑う）」

あなたの胴体に手を回し、密着する。

「んでも委員長はやわらけーな」

「あとなんか……良い匂いするかも」

「なにこれ？（匂いを嗅いでから）……シャンプー？」

「（匂いをかいで、吐息）……やべー、病みつきんなる（笑う）」

「ん。おっけ、行くぜ」

「あ。場所分かる？」

「分かるよな。遊ぶのあのへんしかねーし」

「じゃ、よろしく♪」

ゆっくり走り出す自転車。

「（ぐらぐらと揺れて）おー、おー、おー？　おおお……」

「（笑う）……こえー」

「おっ、いけたいけた。バランスとれてる」

「いいよ。うまいうまい」

自転車、走る。

「……（笑う）」

「（笑って、しみじみと）なんか久しぶり」

「風がきもちー」

「……（笑う）」

自転車、走る。

「速度出るだろ。二人分載ってるから」

「ま、この時間道空いてるし大丈夫だって」

「……」

自転車が加速する。

「おー、速い速い（笑う）」

「スピード出たなあ」

「ビビった？ ドキドキしてる」

「うん。わかる」

「すげードキドキってんぞ」

あなたの背中に耳を重ねる玲。

「……（あなたの心音に耳を傾け笑う）」

「でも、速いときもちーだろ？」

「あたしも久々に味わった」

「……（吐息。いいことを思いつく）」

「なーなー」

「バイク取り返したらさ、こんどはあたしがケツに委員長乗っけっから」

「ぜってー楽しいよ。乗ったことないっしょ？」

「だいじょぶだいじょぶ、乗れる乗れる」

「ん。じゃあ、約束なっ」

「空飛んでるみたいにかもちーから、マジ」

「……（笑う。約束ができて嬉しい）」

「景色のいいところかさ。色々あるし」

「……遠くにいけるからいいよな、バイクは」

「……（吐息）」

自転車、走る。

「いいんちょーってさ」

「外部受験組じゃん？」

「このガッコ、なかから上がるのはバカでもできつけど、
なんか外から入るのむずいんだろ」

「がんばったんだなー」

「まあべつに、そんだけ」

「あ。今のなんかあれだな」

「べつにあれだったらあれだけど」

「あー、せっかく頑張ったんだから教室行けとか
説教したいわけじゃねーからな？」

「……おう。分かってんならいい」

「……ん」

「……（吐息）」

「まあでもあれだな」

「がっこーサボってチャリぶつとばすの、きもちーよな（笑う）」

「ついたらさー、どら焼き食べねえ？」

「入口んところで売ってんじゃん」

「てかあれか、食べる前にプリに写すのか？」

「……わかんねえ。やってみようぜ」

「んで、あとはー……あ、化粧なおしてーな」

自転車が走って、風をきっていく。

学校近場のショッピングモールが見えてくる。

【EP05：パウダールームトーク】

○ショッピングモール内

ショッピングモールを歩くふたり。

目当てのたい焼きが期間限定営業だったらしく、別の店に変わっている。

「（落胆して）まじさー……たい焼き、期間限定ってなんだよなあ」

「えー、たい焼きの口だったんだけど」

「まあでもいいっか」

「帰りなんか甘いもん食ってこーぜ。な」

「（独り言な呟き。タバコをやめたので）……やっぱり甘いもん欲しくなんだなあ」

「とりあえずトイレいこ」

「トイレってか、でかい化粧室（けしよーしつ）があんの、あっちのずつと行ったほう」

「あそこだとあんま人もこないしゆっくりできるから」

「んで、途中にさ、めっちゃ通ってる店あるから寄っていい？」

「アクセ。見るだけ、今金ないし。
次のバイト代まだ先でさあ」

「あ、ほら。これ買ったお店。いつもつけてんの」

シャツの下に入れていたネックレスを見せてくれる玲。

「じゃ、行こうぜ」

歩き出す二人。
しばらく足音。

「お。あそこ」

「えー、今日セール？　そういう時期？　マジかよ」

「なんか買った方がいいぞこれ」

陳列商品をとを眺める。

「いいねえ、いいじゃんこれ」

「ん……（真剣に物色する吐息）」

「ん——……（悩む）」

「（耳元に）……ほら見て」

あなたを鏡の前に立たせる玲。
耳元にアクセサリーを重ねてみる。

「地味すぎ？　でも委員長ならこんくらいちっちゃい方が似合いそう」

「それか、こっち……」

「ケバっちいかな？　ハデ？」

「気分あがりそーだけどな（笑う）」

「やっぱりこういうシンプルなやつなー」

「（満足げに）……うん。いーじゃん」

「あ。……委員長に似合いそうなやつばっか選んでた」

「いや今自分のより真剣に悩んでたわ」

「委員長、こういうの普段つけんの？」

「そーかー」

「興味ないとか？」

「（笑って）きょーみはありそうだな」

「なー、記念におそろい買ってこうぜ」

「今日安いし」

「これとかさー、あたしもイロチ（色違い）欲しいし」

「……あ、でもあれかこれ」

パッケージをひっくり返す玲。

「これあれだ。ピアスだな」

「委員長、耳……」

「空いてないよな、そりゃな」

「あたしはほれ」

「ばっちばちだろ？」

「んーと、（右）三つ（左）四つで開いてる」

「四つずつだったんだけどなんかこっち合体したんだよな一個」

「だいじょーぶ、痛くねーよ。
穴あけんのなんか一瞬だし」

「注射のほうが痛いって」

「あたしはセンパイとあけたなー。
えーと……（品物を探す）」

「あーあったほら、これ。なんか穴開けるやつ」

「そ。これで自分らで『ぶすっ』て」

「できるできる。ちょー簡単」

「（笑って）開けちゃう？」

「……ま、委員長が興味あるなら手伝うけど」

「（笑って、見守るかんじで）
急には決めらんねーか。そりゃそーだ」

「んじゃピアスは保留だなー」

「ほかになんかいいやつねーかな……」

「……（悩む吐息）」

「んー、あれ見たあとだといまひとつだな」

「まあいいや。行こうぜ委員長」

足音。

化粧室へ向かう。

○ショッピングモールのパウダールーム（化粧室）

「ついた。ここ」

「お、ラッキー。誰もいない」

「微妙な時間だもんな」

「ほら、椅子もあって広くてきれーだろ」

「んじゃ、座って」

かばんを置き、中身を漁る玲。

化粧ポーチを取り出す。

ジッパーを開け、中から化粧品を取り出し、化粧台に並べる。

「（並べながら）ん……、これと……これ……」

「あー、これ。あと……こっち……」

「これは……（委員長を見る）」

「（選んで）こっちだな」

「（何しているのかを聞かれて）え？」

「せっかくだし委員長もメイクすっかなと思って。しない？」

「あたしはべつに、化粧直すくらいだから」

「まじ？　委員長、したことないか」

「まじか」

「……していい？」

「まあ多少プリのあれで目デカくなったりすんだらうけど」

「でもせっかくだし盛りたくねえ？」

「あたしやるし」

「……委員長がやじゃなければ」

「……おう。任せとけ」

「じゃあ……手で触ってへーき？ 顔」

「おっけ。んじゃ、しつれい」

「まず下地……を、軽く、薄く……」

「……（塗りながら、吐息）」

「肌きれー。赤ちゃんかよ」

「んで、これ……コンシーラー」

「いいんちょー、クマあるぜ。目の下」

「だからこれで塗って隠す」

「ん……ぽんぽん、っと、軽く……（塗る）、
うし（「よし」のニュアンス）」

「なーに？ あんま寝れねーとか？」

「分かる、あたしもさ、ゲーム。ハマってて」

「スタミナ？ ってあんじゃん？」

「回復するの待って無限ループで朝ンなったりとかする。やべーよな」

「あと漫画も。ドーンと無料公開とかしてるとき、マジヤバイ」

「……んーもうちょっと（コンシーラー塗り足す）よし」

「……」

「夜寝れなくて暇なときは、電話くれよ」

「話し相手になるし」

「どうせあたしもだらだらゲームしてっから」

「寝てても起きるし、委員長からの電話なら」

「……あ、待って、スマホは？」

「あ。それでいいじゃん、アプリの。通話できるし」

ポケットからスマホを取り出す玲。

「アカウント交換しよーぜ」

「……（スマホを操作する）」

「ほれ。コード出したから読んで。友達登録のやつ」

「お、できたできた。んじゃこれでよろしく」

「はいじゃーファンデ」

「うーん。ファンデいらねーか……？ まあ一応な」

「ぼんぼん……ぼん、っと」

「くすぐったかったら言いな？」

「ぼんぼんっとな……ん、よし……」

「まじで一応だな。ま、いいか」

「あとこれ、アイシャドー」

「目、閉じといて」

「ん、おっけ」

「指のほうがいいな……」

「いや、前に自分でさ、チップ目に刺したことあつから、勢い余って」

「ちょっと赤くなったんだよな、白目のところ（笑う）」

「指のほうがなんか力加減わかる」

「いやグイってしたら悪い。しないようにする」

「そんじゃ塗るぞ」

「ん……、おっけおっけ」

「……（メイクに集中する吐息）」

「ふへへ、睨びくびくしてら。」

（囁き）「痛かったら言えよー」

「今ねえ、薄いの塗った。」

「このあとキラキラするやつ……これ」

「はい、キラキラ。キラキラっつと」

「……よし」

「で、ラインくっきりさせるやつ」

「目あけて。委員長二重だから」

「目あけてたほうがやりやすいかな」

「ほら、これな。……（左まぶたにラインを描く吐息）」

「……（メイクに集中する吐息）」

「うおー、ぱっちり二重。描きやすっ」

「こっちも……（右まぶたにラインを描く吐息）」

「……こんなもんかあ？」

「ほれ、鏡見てみ」

「濃くねえよ、こんなもんだろ。」

「……濃いかな？」

「じゃあほら、ティッシュティッシュ。
ちょっとぼかして」

「で最後これ。更にきらきらのやつ」

「目の周りに、これはもうね、どんだけやってもいい」

「……（メイクに集中する吐息）」

「……（塗り終わり、）へへ、きらきら」

「目デカくなったぜ委員長。ちょーかわいい」

「で、ほった。チーク。ばえ」

「（左寄り）ぼんぼん……、（右寄り）ぼんぼん……、で」

「……できあがり、っと」

「あとリップな」

「どっちがいい？」

「これあたしのお気に入りに入り。強そうなやつ。
赤。ぜってー舐めらんねーやつ」

「あとこれ。学校で、怒られねえ用に薄めのやつ」

「あ、こっちは上から塗るやつ。トゥルトウルになる。
色はあんまない」

「ま、これかな。薄いの、いいんちょ似合うから」

「塗るよー」

「……（笑って）イーッってなくていいよ」

「力抜いて、ふっーにして」

「おっけおっけ」

「ん……（リップを塗る）」

「……（メイクに集中する吐息）」

「で、トゥルトウルにするやつもな」

「……（メイクに集中する吐息）」

「（塗って）……うん、ぷるぷる」

「『んーまっ』ってできる？　こういうの。んーまっ」

「そうそうそうそう、おっけー」

「で、ティッシュ軽くおさえて」

「ぼんぼんって」

「おっけ」

「できたー」

「いいじゃん。かわいくなっただっしょ」

「ほらみて。大人っぽくなった」

「あたしも、今日はこっちのリップにしようかな」

「委員長とおそろで」

「ん……（リップを塗る）んーまっ、て（笑う）」

「あと……目ちよい薄いかな……？」

「ライン足しところ」

「……（化粧を直す）」

「（濃いかもと指摘され）ええ？ 濃くねーだろこれべつに」

「……濃くねーよな？」

「……（笑う）」

「ま、行くか。……ん（鞆に荷物を入れ、肩にかける）」

【EP06：おやすみのお留守番】

○あなたの部屋

風邪を引いて、欠席が続くあなた。
昼過ぎの部屋。両親は共働きで不在のため、一人で寝ている。

スマホ越しの玲の声。

「……あ」

「委員長。悪い」

「ちょーし、どうかと思って」

「風邪まだ治らないのな」

「……（心配する）」

「喉痛いんだろ？ 無理に喋らなくていいよ」

「……ん」

「あ」

「午後の授業はじまったっぽい」

「あたしは、今屋上」

「今日もいい天気だしさ」

「……ひとりで寝てんなら、寂しくねーかなと思って」

「……あたしも声聞きたかったっていうか、
いや声は聞かなくてもいいけど」

「ま、そんなかんじ」

「……（吐息。委員長と通話できて嬉しい）」

「……こないださ、がっこーサボったじゃん」

「あんときのせいで、親とかに叱られてたら悪いなと思ってた」

「連れ回して悪かったかなーって」

「……だいじょぶだったん？
親とか先生とか」

「……よかった」

あなたが受け入れてくれたことが伝わり、ほっとする玲。

「……委員長が風邪なおったらさー」

「またどっか行こうぜ」

「今度はちゃんと、サボりじゃない日に」

「どっか行きたいとこあったら教えてくれよ」

「あたしは、前ンところ。」

「やっぱ、あんとき見たピアス気になってて」

「委員長似合ってたもんなー」

「で、なんか調べたらピアスでもイヤリングに変えたりできんだって」

「……委員長がつけてるとこ見たいんだよなー」

「買ったらまたプリ撮ろうぜ。おそろい記念（笑う）」

「前撮ったプリ、いま待ち受けにしてる」

「（笑って）目がでっけえやつな」

「あたし、目つぶってんのにさ、
アイラインがデカくされてんのさ、
何度見ても笑える（笑う）」

「はぁ……（笑いを引きずりつつ、吐息）」

「……」

「あんましあれ（電話が長引いても）だと、
熱上がってもあれだしさ」

「早く治ってほしーし」

「だから、ほどほどで切り上げるわ」

「話聞いてくれてありがとな」

「委員長」

「がっこーで、また」

「風邪なおったらな」

「……はやく元気なってくれよ」

「ん。じゃ」

「……………」

電話を切りたがらないあなた。

「（苦笑して）あたしももっと喋っていいーなら喋ってるけどさー」

「委員長、寝たほうがいいだろ？ な」

「（優しく笑って）じゃーな」

「おやすみ、委員長」

「……………待ってるからさ」

窓の外の環境音。しばらく続く。

【EP07：屋上占有倶楽部3・病み上がりのステップ】

○屋上

スマホ越しの玲の声。

風邪が治って登校したあなた。

昼休みに屋上へ向かう。

屋上に玲がいる。

「よ。いいんちょ、ひさしぶり」

「風邪、治ってよかったな」

「……（嬉しい吐息）」

沈黙が続く。

久しぶりに会えて嬉しい様子の玲。

何から話せばいいか分からない探し合う雰囲気。

玲はなにか言い出したい様子。

「今日弁当？　だよな」

「あたしこれ。パン。毎度のやつ」

「（じーっと見る。おかずを分けて欲しい）……」

「ふへへー♪ おかず、もらっていいのー？ やったぜ」

「久々の委員長弁当だ」

「おー、相変わらずキレーな弁当……」

「これなに？ トンカツ？」

「（あなたから聞いた答えを反芻して）ささみチーズカツ。食ったことねえな」

「それくれ。あー（口を開ける）」

「（おかずを口に入れてもらう）あむ。……ん……」

「（咀嚼して）おー、チーズ。うめーなこれ」

「うん、美味しい。かーちゃん、料理上手な」

「ごちそうさん」

「委員長も料理すんの？」

「まじでー。食ってみてーな」

「（お弁当作ると言われて）え、いいの！？
でも弁当って朝作るんだろ、大変じゃん」

「……まーじで？ 超楽しみなんだけど」

「えー、じゃあさ、玉子焼き入れて」

「委員長んちの味。あれ好きだし」

「あとは委員長の好物入れて。覚えるわ」

「……（嬉しい吐息）」

「はー……（嬉しいため息）」

「……ん……（パンを食べる）」

「……（咀嚼音）」

しばらく咀嚼音が続く。

「……（ストローで飲料を飲む）」

「……はあ（食事が落ち着いた吐息）」

「……………（言い出しかねた沈黙）」

「……いいんちょー」

「今日さ、……びっくりした？ 朝」

「あたしもびっくりした、自分のことだけど（笑う）」

「教室行くのめっちゃ久々」

「しかも朝から、遅刻ナシとか」

「いや、昨日いいんちょーがメッセくれたじゃん」

「明日は学校来るって。それで」

「なーんか……朝目え覚めちまって、アラーム鳴る前に」

「めっちゃ朝だーって思って……」

「めっちゃ久しぶり」

「いつも昼前だもん、起きんの」

「まあ、うん。……（照れ臭い吐息）」

「いや、委員長が休みのあいだに何度か。午後からだけど」

「まあ、寝てたけどな。授業中は」

「（明日も来る？と聞かれ）……明日か。明日なく、明日も起きれっかな……」

「あ、そだ」

「じゃあさ、委員長が起こしてよ。朝」

「そしたらあたしも起きれっかも」

「委員長、どーせ朝早いんだろ？」

「しちじ？ ……ろくじ？ はやっ」

「え、普通かあ……？ そーだっけ」

「でもそれでいいし。起こしてよ」

「それなら明日も教室行けるかもなー」

「……」

「まー、べつに……」

行きたくなくて行ってなかったってわけじゃねーし」

「きっかけ？が、あればと思ってたんだよ」

「……委員長のおかげ」

「委員長がいるならいいかなーって思ったし」

「てか、なんかさ、委員長のいないあいだ考えてた」

「屋上で一人だけーっとさあ」

「委員長と、もっとさ、一緒にいるにはどーしたらいいんだ？って」

「いや……会えねえのが寂しかったんだよ。昨日まで」

「……でさ、気づいたわけ」

「委員長ってさ、委員長じゃん」

「うちのクラスの委員長じゃん」

「ってことはさ、あたしが教室行けばいんじゃない？ 逆に」

「って思っ

「めっちゃ簡単なことだった」

「何度も『いいんちょー、いいんちょー』って呼んでたのにさ、気づかなくて……（笑う）」

「まーでも今朝のは新記録。朝イチからだぜ？ えらすぎ」

「委員長のびっくりした顔も見れて最高だったし」

「……委員長の顔見れてよかったし」

「……（ストローで飲料を飲む）」

「……でもさ、委員長はさ、教室居らんなくてこっち来たんじゃない？」

「なんつーか……そういうときあるわけじゃん」

「いじめられてなくても、浮いてなくても、やんなっちゃうやつ？」

「まだそれだったら、委員長無理に教室行くことねーし」

「あたしが戻ったせいで逆にこっち来づらい感じになってもやだし」

「逃げ場？……みたいなの、必要だと思うしさ」

「……」

あなたの気持ちに寄り添う玲。

あなたは、自分としても委員長としても、

教室に居づらい自分の心境を克服したいと考えている。

もう少しの勇気があれば克服できそうだという。

「……あー、勇気な」

「勇気いるよな」

「（あなたに聞かれて）……勇気の出し方……か」

「……あたしは、そーゆーときはバイクぶっ飛ばした」

「ト深夜ね」

「スピードめっちゃ出してさ」

「いや、ビビるよマジで」

「頭んなか真っ白になるくらい速えーの」

「もうやんないけど、あんなバカなことは。コケたらまじで死ぬし」

「でも、別の怖いこと？でさ、塗りつぶすってーか」

「吹き飛ばすってーか」

「……度胸試してやつ？」

「……お」

「なんか思いついた？」

「あー」

「いいね、それ。いいじゃん」

「委員長の度胸試し」

「いいよ。見届ける」

「んじゃさ、買いに行こう。ピアッサー」

「あ。チャリ、ケツ乗っけてくれよ。委員長（嬉しそうに）」

【EP08：ファーストピアス・ファーストキス】

○ショッピングモールのパウダールーム

ピアッサーを買い、化粧室へきた二人。

玲は、自分でピアスを開けるあなたを見守る。

「うおー、久しぶりに見るこれ」

「おっけー、手伝う」

「まず消毒な。これで……」

「（くすぐったさに共感して）くすぐったいなー？
がまんがまん」

「で、ペンでマークつけんの。穴あけるとこ」

「委員長、どーしよっか」

「……あたしがあけてんのはね……」

「（あなたの耳に触れながら、耳元にく）
んこと、ここ。ここ、あとここ」

「そうそう軟骨。

こっちはちょっと痛いからビギナーには向いてねーな」

「まあやっぱ、ここ？ ふつーに」

「ピアスもここつきたいもんな」

「うし。じゃ、マークつける」

//SE…ペンのキャップを外し、あなたの耳たぶに点を打つ

「(マークをつけて) ……よし」

「で、だ」

「いよいよだな」

「ま、委員長のペースでな」

「あたしはいつまでも待てるし」

「ゆっくりゆっくり」

「……お、いくか？」

ピアッサーで耳を挟むあなた。見守る玲。

「……（見守る吐息）」

「……（笑って）ゆっくりでいーよ」

「焦るこたないって。な？」

あなたは、玲の手を握りたいという。

「……お。いいよ、手握ってな」

「落ち着くまでぎゅーってしてるわ」

「……委員長、脈速いなー」

「伝わって来るよ、どくんどくんって」

「いい、いい、落ち着きな。深呼吸深呼吸。ほら」

「すう………はあ………（深呼吸）」

「………（深呼吸を3回）」

あなたに手本を見せるように深呼吸してみせる玲。
あなたも玲に続いて深呼吸をする。

「……（様子を窺う吐息）」

「（耳元に囁き声で）落ち着いてきた？」

「よかった」

「お、やるか」

「がんばれ、委員長」

「……（見守る吐息）」

「……（息をのむ）」

「……委員長」

「できたじゃん（安堵の笑い）」

「すげーよ。痛くねーか？」

「ちょっとじんじんするだろ（笑う）」

「一ヶ月はファーストピアスつけっぱなしにしないとだな」

「（心配してるけど軽い調子で）カーちゃんとかせんせーとかから隠し通せっかなー」

「まあ、叱られたらさ、あたしに脅されたって言やいいよ」

「（笑って）……言わないんだ？」

「ん」

「かけーよ委員長」

「ね、試しに今だけこれつけてみる？ おそろいの」

「片方ずつつけるのも、いいよな。委員長、ナイスアイデア」

「ほら、つけてやるから。こっち向いて」

「……ん（ピアスを外し、別のピアスをつける）」

「……できた」

「おー、いいじゃんいいじゃん」

「あたしも、こっちつけようっと」

自分の耳にもピアスをつける玲。
二人で鏡に向き直る。

「みてみて。おそろーい♪」

「……っへへ」

「委員長」

「……ちゅ」

あなたの耳元にキスをする玲。

「……っへへ」

「（耳元に囁く）あたしさ、委員長のこと大好きなんだよな」

「……委員長のこと大好き。これはガチ」

「ずっと一緒にいたい」

「……ってこと、先に言っとく」

「いや……教室でもしほかに誰か委員長と仲いいやつとか見たらさ、あたし妬くからさ絶対」

「でも委員長にそれ知っというてもらえたらだいいじょぶだし……」

「いやわかんねーけど……
知っというてほしかっただけ。あたしの気持ち」

「（あなたが告白を受け入れてくれて驚き）……うそまじ」

「いーの？ 嬉しい」

「あたしさ、大事にするよ、委員長のこと」

「捨てらんねえようにがんばるわ」

「……（幸せそうな笑み）」

「委員長」

「……大好き」

「……（唇同士でキス）」

「……（幸福感の余韻に浸る、笑み混じりの吐息）」

【EPILOGUE】

○あなたの部屋

後日。

バイクが直り、免許も取った玲があなたをバイクで迎えにくる。
あなたの部屋の窓の向こうから聞こえる、バイクのエンジン音。

スマホ越しに聞こえる玲の声。

「いいんちょー。おはよー。おきたー？」

「へへ、驚いた？ 迎えに行くって、言ってただろ」

「これ。直ったからさ」

「あたしの愛車」

「免許もちゃんと取れたし」

「天気最高。風、きもちいーぜ」

玄関から外へ出たあなた。

バイクに乗った玲の姿がある。

スマホからの声と、実際の玲の声が一緒に聞こえる。

「おはよ、いいんちよ」

「へへ」

スマホの通話を切る。

「後ろ乗って。ほら、メットつけて」

「しっかり捕まれよ」

「そんじゃ……いいんちよー」

「（楽しそうに）一緒にぶっ飛ぶぞ」

バイク、走り出す。二人を遠くへ運ぶ。